

「とわ！女の子なんだから、ちょっと手伝って。」

祖母の声がしました。小学六年生の頃、親戚が集まった場でのことです。居間で遊んでいた私は、その言葉に思わず足を止めました。

幼い頃から聞き慣れていたはずの言葉。でもその時の私は、小学校の「人権集会」で習ったある言葉が頭をよぎり、胸の奥がザワザワとしたのを覚えています。

「女の子だから、男の子だからという理由で役割を押し付けるのは、ジェンダー格差のひとつです。」人権集会で学んだ言葉と、「女の子だから」という祖母の言葉。二つの間で戸惑っていた私を助けてくれたのは母でした。

「女の子だからって、手伝う必要はないんよ。今はもう、そんな言葉は使わないで。」

母のきっぱりとした声。祖母は最初は戸惑っていましたが、何度か同じことがあると、それからは「器用だから手伝って」「お姉さんだから」と言い直してくれるようになりました。

私のことを守ってくれる母。言葉でしっかり伝えることができる母。しかし、その時の私はただ「かっこいいな」としか思っていませんでした。あの時母がなぜ、あんなに強い眼差しで私を守ろうとしてくれたのか。その「本当の理由」を知ったのは、つい最近のことです。

中学二年生の職場体験に向けて、私はある一人の働く女性にインタビューをしました。インタビューの相手は、私の母です。母の仕事について詳しく聞くのは、これが初めてでした。

二〇一一年、私が生まれた時。実は母は、管理職を外されていました。母の口から聞いたのは、私がこれまで知らなかった、重く冷たい事実でした。当時、共働きだった母に対し、会社の上司が放った言葉は「男性社員と同じように働けないと、スタッフの模範になれない。だから、子育て中のあなたはサポート役に回ってほしい」というものでした。

同じように親になったのですが、父はこう言われたそうです。「家族を養うために、もっと仕事に励みなさい」と。

私は話を聞きながら、悔しい気持ちと申し訳ない気持ちでいっぱいでした。自分が生まれたことで母の仕事を奪ってしまったのではないか。

この上司の言葉と、あの日、祖母の言った「女の子だから手伝って」という言葉が、私の頭の中でピタリと重なりました。「男性だから、外に出て働く」「女性だから、サポートをする」・・・同じ人間なのに、性別だけで役割を決めつけられ、チャンスを奪われる現実。母がかつて直面した理不尽は、私があの日感じた「モヤモヤ」の正体そのものでした。母は、私に同じ思いをさせたくなくて、祖母の言葉にきっぱりと反対してくれて、私を守ってくれたのだとわかりました。

母はその時の仕事を辞める決断をしました。そして自ら「起業」という道を選び、会社を立ち上げたのです。

「女性が、自分の力で仕事も家族もあきらめずに生きていく姿を、あなたに見せたかった。」

そう語る母の背中が、いつにも増して力強く見えました。母は諦めたのではなく、新しい道を切り拓くために立ち上がった「戦う人」だったのだと、私は初めて気づきました。母は現在、女性専門の事業ビジネスコンサルタントとして、女性の起業を支援する仕事をしています。出張も多く、全国各地を飛び回り、海外へ出張することもあります。私の家では、父が家事をメインで行って、暮らしを支えています。「男だから、女だから」ではなく、お互いの強みを生かした役割分担をしている両親の姿を見て、私は育ちました。

母へのインタビューを通して、私には二つの夢ができました。

一つは、世界中の困っている人や女性、子どもたちを守る仕事に就くことです。

もう一つは、母が私にしてくれたように、現在の社会にある「固定観念」をなくしていくための運動をすることです。

差別をする人は、かつて私の祖母がそうであったように、必ずしも悪意があるわけではありません。むしろ、「それが当たり前だ」という思い込み、無意識の偏見に囚われているだけなのかもしれません。

だからこそ、私はまず自分自身から始めます。相手を「男だから」「女だから」という枠で見るとはではなく、一人の「人間」として向き合っていきます。自分の価値観を疑い、目の前の人の個性を見つめ直す努力を続けていきたいと強く思います。

母が守ってくれた私の未来を、今度は私が、「誰かのための未来」へと繋いでいきます。誰もが自分の人生を、自分の力で選び取れる、そんな温かな社会を目指して。